

ら、迷うて努力するのが研究で、さらに研究していると疑う迷うというわけで、これが研究の本体、科学者の態度であると説かれた。人生は努力すれば迷うが、後には救われるというわけで、これはファウストの一生でもある。

われわれの尊敬する先生は遠い遠い国に旅立たれた

が、残された、円満な人格の上に立った学問的執念を心にとどめ、学問の発展に努力し、その偉業を継承することで先生に報いなければならない。

心から先生の御冥福をお祈り申し上げます。

坂上 務（九州大学農学部）

## 関西支部第3回例会報告

関西支部の第3回例会は、昭和52年3月17日、舞鶴において開催された。この例会は“しぐれ”をテーマとしており、今年度から3年にわたって行なわれる地方共同研究（気象研究所、大阪管区気象台、舞鶴海洋気象台）と関連させて企画したものである。これらの関連官署、特に会場、宿舎、その他の御手配を頂いた舞鶴海洋気象台に誌上を借りて御礼申し上げる。

会場は舞鶴海洋気象台のある舞鶴港湾合同庁舎の会議室、講演題目は次のとおりであった。参加者は、大阪、京都、彦根をはじめ山陰沿岸気象官署の約50名で、盛会であった。

### 講演題目

### 講演者（所属）

- |  |                      |
|--|----------------------|
| 1. しぐれについての統計調査  | 杉浦 茂(舞鶴海洋)           |
| 2. 冬季京都府北部におけるシ<br>ャワー性降水について                            | 堀口 喜一(舞鶴海洋)          |
| 3. 米子におけるしぐれについ<br>て                                     | 川上 護, 原田 晃<br>(米子測)  |
| 4. しぐれと突風について  | 久我雄四郎, 山本二郎<br>(気象庁) |
| 5. しぐれのレーダエコー解<br>析                                      | 杉浦 茂(舞鶴海洋)           |
| 6. しぐれ季節の日本海上の雲<br>分布について                                | 古橋 重利(大阪管区)          |
| 7. 日本海中部における大気安<br>定度(収束・発散)としぐ<br>れ(対流性雲の発生・発<br>達)について | 今井 清(舞鶴海洋)           |

- |                         |             |
|-------------------------|-------------|
| 8. 海面の熱収支について           | 矢吹文太郎(舞鶴海岸) |
| 9. 日本海の海流による熱輸送<br>について | 周 東 健 三( )  |
| 10. 特別講演                |             |

海岸における摩擦効果によ

る流れの変形について

竹内 衛 夫(気象研)

講演内容は、関西支部発行の例会講演要旨集第6号に掲載されているので、詳しい紹介は省くこととするが、しぐれの問題は、日本海沿岸の気象官署にとっては、予報上重要であり、また、海洋と大気の相互作用、積雲対流、豪雪機構等に密接な関連を持っているだけに、幅広い興味を含んでおり、討論も活発に行なわれた。

講演を通じて感じられたことは、この問題を本質的に扱うためには、まず、海面下・海面境界層、摩擦層、さらに上層の観測を有機的に行なうことが必要で、これらは、過去の38年豪雪、AMTEXの成果を吸収した上での観測船や沿岸官署の新しい観測成果に期待するところが大きい。幸い、昨年11月には啓風丸を始めとする気象庁4観測船や、沿岸高層、レーダ観測網が展開され、来年度も、その一部は継続して行なわれることになっているので、その観測成果が待たれるところである。これらの解明を得た上で、しぐれ雲の発生・発達、さらに陸上への移動・推移が論ぜられることになろう。

この例会は、まだそこまでの段階を待たず、イントロダクションとしての問題提起の域は出ていないが、将来への示唆は豊富に感じられた。

(地方理事 坂根教閣)